
未裔たちの伝説

夢織 菜摘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未裔たちの伝説

【Nコード】

N1575R

【作者名】

夢織 菜摘

【あらすじ】

ルーメリア王城にもたらされた内乱勃発の急報。それがすべての始まりだった。

否応もなく戦場に引きずりだされた、のん気な第二王子ファルヴアルトも度重なる犠牲を前にして変貌を余儀なくされる。

戦記風シリラスファンタジー。ルーメリア王家と魔法使いたちとの最初の出会い。

プロローグ

巨大な湖は夕陽の残光をあびて、きらきらと金色にかがやいていた。

すでに周囲の森は、薄闇の中に沈み込もうとしている。

湖のほとりの丘陵には、三つの尖塔を持つルーメリア王城がたたずみ、裾野にひろがる城下町ワーゼンに、黒々とした長い影を投げかけていた。

王城の三つの塔の先端は夕陽をうけ、星の輝きを宿しているかのようであった。

それゆえに『星宿城』の異名を冠されてはいるものの、この灰色の王城は、その名にも、この美しい風景にもそぐわぬ、機能一辺倒の無骨さをもっていた。

周囲に張り巡らされた高い城壁は、ごつごつとしたいかにも頑丈そうな石で組み上げられ、そのまた周りに巡らされた堀は深く、濁った水のなかには尖った杭がかくされ、よそものの侵入を厳然と拒んでいた。

城下町から王城へとのぼる一本道を一騎の早馬が、駆けのぼってくる。

馬はみずからの汗に濡れ、黒光りしていた。その乗り手もまた汗にまみれている。使者としての身分をしめす紋章を金糸で大きく刺繍してある灰色のマントが、不吉な影であるかのようにその背後になびいていた。

坂道の終点にたつすると馬をとめ、堀のむこうの門にむかって、はりつめた声で呼びかける。

「開門、開門」

門の護りについてはいる衛兵が小さなのぞき窓から使者を認め、城がわに巻きあげた橋をおろす。滑車がきしむ鈍い音が響いて、橋がおりてくる。

だが、使者はそれをも待ちきれずに、まだ最後まで下りきつていない橋に馬ごと飛び乗ると、つむじ風のように城のなかに駆けこんだ。

(1) 令嬢と第二王子

ルシニア湖を金色に輝かせていた昼の光の名残りは去り、湖面は闇のなかに隠された。湖の波音の囁きが、風に乗って運ばれてくるだけの穏やかな夜だった。

王城の湖側に張りだしたテラスの一つに灯かりがともった。なんの装飾もない白い大理石のテーブルの側の男女が照らしだされる。

女のほうは十五、六くらい。まだ少女と呼ばれるのにふさわしい年代である。ルーメリア人特有の黒髪に黒い瞳、やや浅黒い肌。大きくなるりとした瞳が印象的である。

濃緑色のゆったりした簡素なドレスを身にまとい、立ったままいらいらと早口でしゃべり続けている。つやのある長い髪は大人っぽく結びあげられていたが、勢いのある髪質のせいで、今にもほどけおちてしまいそうだった。

男の方は二十二、三くらいの精悍な青年であった。くつろいだふうに椅子に座り、少女の話をつとんじる風もなく、逆におもしろがっているような表情を浮かべて、聞き流している。こちらも少女とおなじ黒髪と黒い瞳であったが、やや茶色がかり、肌の色も白い。純粋なルーメリア人とは言いがたく、異国の血を感じさせる。体つきは特別がつしりしているほうではないが、華奢というかんじはない。むしろ、よく鍛えあげられて、むだな筋肉がそぎおとされている感じだ。

黒づくめのなりをしていたが、腰にさげられた剣のつかの宝石が、テラスのひさしからさげられたランプの光を反射して青い炎のようにかがやいていた。

「兄様なんか、大キライ！ 館にどこの馬の骨かわからない女を引き入れたのよ。しかも、正式な奥方にするんですって。それは、私よりは少しばかりキレイな人だね。髪なんかまるで金でつくったみたいだし。だけど、あんな高飛車で傲慢な女のどこがいいの？ う

うん、そんなことはどうでもいいわ。これはわが伯爵家はじまって以来の醜聞だわ」

この少女の兄、ライエル伯爵ルジエンはこの春、父の後を引きついでその位についたばかりだった。ライエル伯爵家自体は長い歴史を誇る名家で、王族との親交もあつい。また若きライエル伯爵は勇猛果敢な武将として名を馳せていた。

男はややつくりが大ざっぱなもの、精悍な顔に好奇心を閃かした。「いったい、その人はどういう人なんだい、ノエル」

「まあ、ファルってば、わたしの話をぜんぜん聞いてなかったのね」ノエルはきつい一睨みを彼にくれてやると続けた。「兄様がどこからか、拾ってきたの。狩りの途中かなにかで。どこか異国の人ね。青い瞳に金色の髪をしてる。白くてとてもきれいだけど、薄気味悪いわ。それにあの瞳。あれは何かをたくらんでる目だわ。きつと、お兄様の財産と地位をねらってきたのよ。それなのに、お兄様ときたらあの人にぞっこんなの。ついには結婚するだなんて言い出して、お屋敷じゅう大騒ぎだわ」

(あのカタブツがやるもんだ)

ファルは 正式の名をファルヴァルトという 心のなかで呟いた。ライエル伯爵とその妹をまじえて、彼ら、王家の兄弟とはいよいよ幼なじみで遊び友だちだった。だから、伯爵の人となりはよく理解していた。実直で朴訥な人柄の彼は女性が苦手で、きれいな女性を目の前にすると、ただオロオロするばかりだったのだ。それが、身分違いの女性と結婚するのだという。彼らしいといえば、彼らしかった。

「ねえ、どうしたら、いいのかしら。なにを言ってもお兄様は聞いてくれないの。レルドリック様ならなんとか諫めてくださらないかと思ったのに、会ってくださらないし。こんな話、手紙や人を介してっていうわけにはいかないのに」

「俺じゃ、頼りにならないってわけか」

ファルは憤慨するようにつぶやくと、ノエルがそれを聞きとがめ

た。

「ファルなんてダメよ。おもしろがって、問題を大きくするのに決まってるもの。今だって、ちっともマジメにとりあってくれてないじゃないの。でも、あなたのお兄様のレルドリック様はちがうわ。あの方は特別なもの」

ノエルの大きな黒い瞳がきらきらと輝く。彼女はルーメリアの王太子レルドリックの許婚であった。

その婚姻は異国の姫を母に持つ王太子の国内での立場を強化するはずであった。また、ライエル伯爵家としても王家とのつながりが深まり、その国内の地位をゆるぎなきものにするであろう。

だが、そういう双方の家の思惑があるとはいえ、彼女は許婚である王太子を純粹に慕っていた。だから、もちろん、彼女の言い分には少しばかりの娘らしい幻想が混ざってはいたが、レルドリックは『特別』と言われるだけの人物であることは、彼の弟であるファルさえも認めずにはいられないものであった。それが証拠に、彼自身も心から兄を敬愛していた。

「よくご存じで」

ファルは茶化すように両手を広げてみせ、立ち上がった。「この件は兄上に伝えておこう、ノエル」

急にマジメな顔になって言った。

ノエルは一步進みでると、ほのかに頬を染め哀願した。「どうしてもレルドリック様にお会いできないのかしら」

ファルは決心をつけかねるようには彼女をみやり、ためらいがちに言った。「君は兄上の婚約者だ、知る権利はあるとおもっ。父上が病に弊れた。兄上は国王の代役を果たさなくてはならない。私的なことに費やす時間はあまりないんだ」

「国王陛下が……」

ノエルはその場に硬直してしまった。

「まだ公式発表はしていない。君もライエル領に帰ってもこのことはしばらく内密にして欲しい。兄上が国王としての責務を滞りなく、

引きつげるだけの時間が稼げればいいのだが」

「お悪いの？」

「よくはない。いまは落ち着いておられるが。侍医の話ではいつ容体が急変してもおかしくないそうだ」

「まあ！」ノエルは口元に右手をあてた。「あなたは国王陛下の側についてなくてはいけなかったのね。それなのに、わたしのくだらないおしゃべりにいつまでもつきあって下さったのね」

「くだらなくはないさ、ノエル。君や君のお兄さんの消息を聞くことは俺にとっても、兄にとってもうれしいことだよ。少しは気も紛れるしね。それに俺がそばについていても、容体がよくなるというわけではないんだからね」

なだめるようにおだやかな口調でファルは言ったが、その茶色がかった黒い瞳に悲しみの色を認めて、ノエルは胸をつかれ、慰めの言葉を口に出そうとした。

と、ファルはふいにノエルを背にかばうようにして、テラスの出入り口を蔽い声で推可した。「だれだ！」

腰をかるく沈め、右手が剣の柄のうえにおかれた。

(2) 王太子の訪れ

戸口に引かれたままだったレースのカーテンをはらいのけて、鎧胄で武装した近衛兵が数名、武具の鳴る金属音も華々しくすすみでてきた。

抜刀こそはしていないものの、ものものしい警戒ぶりであった。

「何用だ！ 伯爵令嬢の居室と知つての狼藉か！」
ファルが一喝する。

衛兵たちはルーメリアの第2王子に型通りの礼をしたものの応えず、代わりに左右に展開し、背後からあらわれた人物をうやうやしく通した。

「兄上？」

毒気をぬかれたようにファルがつぶやくのと、彼の背後のノエル姫がぱつと顔を輝かせるのは、ほとんど同時だった。

ルーメリア王太子レルドリック。

漆黒の瞳に強い光をうかべ、桜色の唇を引きむすび、そのととのつた顔からは表情を消し去っている。つややかな漆黒の髪はきれいに肩先で切りそろえられ、身体の線もファルと比べれば、ずっと細く小柄だ。日に灼けない肌は透きとおるように白く、灰色の胴着の上に青いマントをはおっているのがよく似合った。

ファルヴァルトとは、おなじ両親から生まれ、年も二つしかちがわないのだが、二人は互いにまるで似ていなかった。

こうやって並んでみると、その違いは際立つ。容姿ではない魂の形が、である。たしかに弟のほうが、精悍な男らしい容姿をしており、兄のほうはどことなく少女めいた繊細な美貌の持ち主である。だが、弟が明るい人好きはするが、いつもおどけたような暢気な様子をしているのに対して、兄のほうはあたりをはらう威風堂々とした雰囲気があり、その黒耀石のような瞳に野性の獣のような猛々しさを宿すゆえに、繊細な容貌にかかわらず、少しも柔弱にみえな

った。

「ライエル伯爵が叛旗を翻した。ノエル姫の身柄は拘束させてもらう」

レルドリツクの声は感情をおさえた穏やかなものであったが、二人をおどろかすには充分であった。

ノエルは前に進みでてくると、大きな瞳をより大きく見開いて、訴えかけるように言った。「お兄様が……、ウソよ！」

「嘘ではない。さきほど使者より報告があった。所領の兵五千を率いて、街道を攻めのぼってきている」

厳しい内容にもかかわらず、レルドリツクの答には言い含めるような優しい調子があった。

ノエルは顔を強張らせ、側にいたファルの腕を無意識のうちにつかんだ。

ファルは元気づけるようにノエルの背を軽くたたいて、兄と相対した。

「しかし、なにもここまでしなくても」
武装した屈強の衛兵たちに目を走らせる。

「形式的なものだ、ファルヴァルト。反逆者の妹を王宮のなかで野放しにするわけにはいかないからね。さあ、姫。お部屋にお入りになつてください。危害を加える気はありませんから」

ノエルは気丈にも言いつのつた。

「いいえ、これは、なにかの間違いですわ。お兄様はそんなことができる人ではありませんもの」

レルドリツクは答えず、弟に視線を投げかけ合図した。

ファルヴァルトは仕方なそうに肩をすくめると、ノエルをつながした。

「とにかく部屋にはいるう、ノエル」

そのまま肩を抱くようにして、部屋の中に彼女をおしやった。

部屋の片隅では、ライエル領からノエルにつき従ってきた侍女たちが不安そうに身をよせあっていた。

レルドリックが指示をくだし、外界からの接触を断つように衛兵の二人をテラス側にもう二人を廊下がわの戸口につかせると、ノエルをふりむいた。

ノエルは怒りと不安のないまぜになつたような視線を彼女の婚約者　いや、彼女の兄が反乱を起こしたというこの状況下では、

それも御破算となるであろうことはたしかである　にかえした。

「ノエル姫、ご不自由だとは思いますが、彼らはある意味ではあなたの護衛です。その点はご了承していただくしかないでしょう」

ノエルは古い歴史を誇る伯爵家の姫としての誇りをかきあつめて答えた。

「わかりますわ。でも、もし、これがなにかの間違いであつたら、いえ、そうに決まっていますけど、どう償いますの」

きつとレルドリックをみあげるノエルの黒い瞳にはいかようなことにもおとしめられることを拒む毅然とした光りが浮かび、いつもの彼女よりずっと大人びて、そして、また美しくみえた。

レルドリックは感嘆したようにわずかに口元に微笑を閃かせた。

「その償いができることを私以上に望んでいるものはいないでしょう」

彼はそう答えると、高貴な貴婦人にするように片ひざをつき、彼女の右手をとつて、桜色の唇をかすらせた。

ノエルは、ぱつと赤くなるいつもの子供っぽい表情にもどり、手をひっこめた。彼女はレルドリックとファルヴァルトの兄弟とは幼なじみであつたこともあり、いつも子ども扱いされていた。このように遇されたのは、はじめてだったのだ。

レルドリックはマントの裾をひるがえして立ちあがると、ノエルのわきで不謹慎にも苦笑をこらえかねるような顔をした弟に声をかけた。

「ファルヴァルト、これより軍議だ。一緒にきたまえ」

(3) 嵐の前に

ほの暗い城内は、戦いを控えているというのにしんと静まりかえっていた。だが、それは嵐の前のぴりぴりした緊張をはらんだ静寂さにほかならなかった。

回廊のところどころに設置されたランプの光が照らし出すむきだしの寒々しい灰色の石壁が、彼らの足音をうつろに反響していた。

「この度の討伐隊、おまえに指揮を任せることになるぞ」

レルドリックは背後に適度の距離　　内緒話は聞こえぬが、い

ざ事があったときにはすぐに駆けつけられる距離　　をあげて、つきしたがう護衛の兵に聞こえぬよう声を低めてささやいた。

もともと、ルーメリアは質実剛健を旨とする尚武の国であってみれば、王族といえど、城内では必要以上の随員を連れてあるく習慣はない。だが、今は非常時である。ましてや、王が弊れたいま、世継ぎの王太子の身になにかあってはならぬ。

それゆえ、かれの護衛には勇猛果敢の誉れたかいルーメリア王国騎士団のなかでも生え抜きのものが配されていた。

「なんで、俺が？」

ファルヴァルトはくいと片眉をあげ、心底イヤそうにささやき返した。

「おまえの気持ちはわからないわけではない。ルジエンと我らはよき友人であったのだからな。だが、考えてみるがよい。それは兵たちも同じなのだ。肩をならべて戦い、ともに死線をくぐりぬけてきた相手と今度は刃を交わさねばならぬ。士気をさげぬためには、これらの護るべき国の象徴とでもいえる存在が必要だ。王家の血筋を引くものこそが、一番の適任となろう。わたしが出ればよいのだが、父上があのような様子ではな」

「ずいぶん頼りない象徴に思えるけどな」

ファルヴァルトは片頬を人差し指でぽりぽりとかきながら、とぼ

けたふうに応じた。

兄、レルドリック王子にくらべ、弟のほうの評判はそれほど芳しいものではなかった。風采も剣技も勉強においても、彼は兄に一步も二歩も遅れをとっていた。そのうえ、それをまったく気にかけるふうのない彼は甘やかされた呑気で気楽な次男坊として通っていたし、本人も十分に自覚していた。

戦いの指揮官としていただくにはあまりに頼りない存在といえるだろう。

レルドリックは持ちまへの射るような厳しい眼差しを弟にむけた。「お前が人に思わせているほど無能ではないことは、私が一番よく知っている。いつまで気楽な第二王子の身分に甘んじているつもりだ？ たまには表舞台に出てみてはどうなのだ」揶揄するようではなく、むしろ挑むような口調だった。

「そいつは買いかぶりというものだよ」

彼はあきらめたようにつぶやくと、早々に話題を変える。

「ノエルも言っていたが、俺にもどうしても信じられん。なんだって、ルジエンは反乱の兵を起こす必要があるんだ？ そんなことをしなくとも、ノエルを兄上に嫁がせば、名実ともっとも有力な貴族としての発言権をにぎることができるじゃないか。それに、大體、ルジエンは王座をねらう野心にとりつかれるようなタイプの男じゃない」

「私もそう思うよ、ファル。どうしてもその点だけは腑に落ちぬ。しかも、妹がこの城に滞在しているというのに、兵を起こすとはね。妹を人質としてつかわれることも辞さぬ構えなのか。目的のためには手段を選ばず、か。それほど冷酷になれる男ではなかったはずだ。いったい、なにが奴を変えたのだ」

「女かな？ ノエルがいつていたんだが、ルジエンは氏素姓のしれないどこか異国の女を妻に迎えるつもりでいたらしい。他国の間諜かなにか、だったとか」

ファルヴァルトは軽い気持ちでいったが、その兄は深刻そうに考

えこんだ。目をなけば閉じ、猛々しい光を帯びた瞳がかくれると、
かれの少女めいたあでやかな面ざしがきわだった。

数瞬後、レルドリックは目をあげると答えた。

「いや、それはなかるう。クラディアは大国だが、大国ゆえに疲弊
し、他国とことを構える余裕はないはずだ。カレンダ公国にいたつ
ては王位をめぐつての内戦中。とてもよその国に構っていられる状
態じゃない。ソーレア国とは長い間、国境をめぐつて揉めてきたが、
それも父がソーレアの王女を迎えるまでの話。いまさら、戦いをし
かけてくる気はあるまい。ただ、気になるのは出兵のタイミングが
あまりによすぎることだ」

「父上が弊れられたことか」

「そうだ。必然的にこちらの士気もさがる。それになんといつても
我々は正妃とはいえ、異国の姫の息子であり、半分は異邦人だ。そ
の支配を快くおもわぬ輩もいる。ひるがえって、ライエル伯爵ルジ
エンは生粋のルーメリア人であり、祖母に王家の姫をもつ。王位継
承権を主張してもおかしくはないだろう」

ルーメリアの王が国外から王妃を娶ったことは、この国の開闢以
来のことであった。

それまでは王は代々、国内の貴族たちの娘をめとり、王家の姫は
たいてい貴族たちのもとに降嫁したので、いまでは王家と姻戚関係
のない貴族のほうがごくめずらしい。

そのため現王の婚姻が、国内の貴族たちの反感をかったことは周
知の事実でもあった。

「そんなこと言ったら、国内の貴族の大半はそうじゃないか」

ルーメリアは民族としての歴史は長いが、国としての歴史は浅い。
たかだか百年ほどである。もともと小さな国とでもいうべき都市国
家にわかたれ、たがいに領土拡大をねらってたえまなく戦いをつづ
けていた。俗にルーメリアの暗黒時代といわれる。親子が殺し合い、
兄弟がいあらそい、娘は政略の道具としてつかわれ、度重なる戦
いに民が疲弊していった戦乱の時代でもあった。

だが、北にひかえる大国クラディアの脅威によって、事態は推移した。

クラディアの侵攻を阻むために都市国家間では盟約が交わされ、盟約を結ぶにあたってもつとも功のあったワーゼン公フアノルが盟主として選出された。

かれはまた総指揮官として連合軍の指揮をとり、クラディアとの幾度かの戦いに勝利をもたらした。都市国家間の結束はかたまり、やがて彼は王位につきルーメリア王家の祖となった。

各地の都市国家の領主たちには貴族の称号が与えられたが、もともとが小国の王と言っていい存在であったので、ルーメリアにおける貴族の実権は他国におけるよりもはるかに強く、王権に無条件に平伏しているわけではない。

「そうだ。だから、もし、ルジエンがわれらの王権をくつがえして王座についたとしても、次なる内乱が起こることは必定。国は瓦解し、ふたたび、血で血をあらう暗黒の時代に逆もどりすることになる。それゆえ、早急にルジエンを討ち、この内乱を鎮める必要がある。ただでさえ、われわれは内部に火種を抱えているのだ」

だが、神ならぬ身ゆえ知るすべもなかったが、ファルヴァルトはこのときノエルが語った女のことをもつと深刻に受けとめるべきだったのだ。

(4) 出陣

出陣の朝は、雲ひとつなく晴れわたっていた。だが、現状はその空のように心楽しいものではない。すでに反乱の報より二日たち、街道ぞいのカスヤとロドーの砦が落とされ、ライエル反逆の報は確実なものとなった。

青くまばゆい天蓋のもと、王城の前庭には王家直属のルーメリア騎士団三千が整然とならび、出陣のときを待っていた。陽光が騎士たちの銀色の鎧かぶとや槍の穂先をきらめかす。

ひとときわ高くしつらえられた壇上に、一人の正装した長身の騎士が姿をあらわし、波のようななどよめきが生じさせた。

銀色の羽飾りのついたかぶとを胸にかかえ、胴にルーメリア王家の獅子の紋章をうちだした銀色の鎧を身につけていた。そのうえにまとった漆黒のマントの肩飾りが、鈍い銀色の輝きを放つ。腰に大剣をはいたその姿は、凜然とした威厳にみちて、およそいつものどこかぬけた感じのファルヴァルト王子らしくはなかった。

かれは厳しいまなざしでゆっくりと兵たちを検分した。レルドリック王子の予想通り、どう見ても騎士たちの士気は高いとはいえなかった。別にいちじるしく軍規を乱すものがあるわけではなかったが、どこことなく不安げな空気が流れていた。

すでに先日、王の不例については一般に公布してあった。下手に隠しだして、無用の混乱を招くよりはという、王太子の判断であったが、それが裏目にでたようである。

(やれやれ。これは、一筋縄ではいかないか。ああ、面倒だ)
心のなかでため息をつく。

しかし、そうは言ってもいちおう兵を鼓舞しておかなくてはならない。

「ルーメリアの誉れ高き、王国騎士団の諸君。いまや、われの偉大なる故国は危機に瀕している。われらが王の忠実なる臣下であった

ものの反乱によつてだ。すでにカスヤ、ロドーの砦は落とされた」
ここで、いったん言葉を切つてファルヴァルトは騎士たちを見渡した。

しんと静まり返つて、かれらは、王子の次の言葉を待っている。
期待と不安のないまぜになつた三千人の視線が、ルーメリアの第二王子にまわりつく。彼らは彼らなりに、このあまり評判の芳しくない王子を見定めようとしていた。

(ここが正念場か)

他人事のような感想を胸に、ファルヴァルトは言葉を続けた。殊更に嘲るような調子をまぜる。

「このような反逆を看過してよいのか。そうするほど、われらは腰ぬけか！」

「否！」

「腰ぬけなものか！」

自尊心を刺激され、否定の叫びがここで起こつた。
期待通りの反応に、ファルヴァルトは力強く応えてみせた。

「ならば、われらの手によつて、反逆者を断罪しようではないか！
一騎当千を誇るルーメリア騎士団の実力をみせてやるのだ！ ルーメリア王国、バンザイ！」

燃えあがるときを待っていた熾火のように、騎士たちの戦意がきたてられた。

いったん思いこめばどこまでも突つ走る、猪突猛進型のルーメリア人気が幸いしたともいえよう。

「ばんざい、ルーメリア王国、ばんざい！」

「国王陛下、バンザイ！」

「ファルヴァルト殿下、ばんざい！」

喝采の声がひとしきりなりやまない。

愛国心と己の矜持につきうごかされた兵たちの熱狂が絶頂に達した瞬間を見はからつて、ファルヴァルトは手にした銀の采配をさつとふりあげた。ふいに兵たちは水を打つたように静まりかえつた。

「いざ、出陣！」

采配は降りおろされた。

「どうやら、寝た子を起こすのに成功したようだな」

討伐軍の見送りに出てきていた王太子が弟に言った。ルーメリアの紋章が銀糸で刺繍された白い胴着にやはり白いズボン、そのうえに銀の毛皮の縁どりのついた白いマントという王太子の正装をしていた。その瀟洒な身なりは、騒然としたこの場の雰囲気にはそぐわなかったが、かれ自身にはよく似合っていた。

「兄上のマネをしただけですよ」

ファルヴァルトは渋面をつくって、そっけなく答えた。そうすると、騎士たちの狂熱を引き起こした当人とはとてもみえない。

「いや、兵たちのことじゃない。おまえ自身のことだ」

謎めいた笑みを口もとにはいて、王太子は答えた。

「ま、たまには俺だって役に立つところをみせなくてはね。しかし、そう何度もあてにしないでくださいよ。俺は兄上のように出来はよくないんだから」

「それは、どうかな。おまえが本気になったら、私なぞ足もとにもおよばないのかもしれない」

述懐めいたふうにいうレルドリックの繊細なおもざしに憂慮の翳りが走つたのをみてとって、ファルヴァルトは眉をしかめた。

「悪い知らせですか？」

「まあな、すでにお前の耳にも入っているとおもうが、ライエルは魔法使いを味方にひきいれたらしい」

「ライエルに破れた砦の残存兵の報告だったな。そんなもの、自分の無能さを正当化する言い分に決まってる。まともにとりあうなんて、どうかしていますよ」

ファルヴァルトはおもしろくもなさそうに足もとの小石を蹴った。小石は石畳みのうえをからからと乾いた音をたてて転がった。

「私も最初はそう思ったのだが、こう報告がたび重なるよね、気に

なりもする」

「しかし、兄上。大体、魔法使いというものは、世俗のことには関心をもたず、身内だけで固まっているもんでしょう。なんだから、今度に限ってでてくるんだ」

数百年まえに滅んでしまっただが、人にくらべれば永遠といえるほどの寿命と強大な魔力をもつ種族が存在していた。

魔法使いとは、マセラスとよばれていた種族と人とのあいだに設けられた子孫であり、それゆえその魔力と長い寿命を受け継いだといわれていた。

だが、かれらの大半は深い山中にかれらだけの村をつくり、世のなかとは隔絶した暮らしを営んでいるために、滅多に話題にのぼることさえない。なかば伝説化した存在であった。

「さあね、実際のところは、ほんとうに魔法使いが実在するのかどうかも定かではないが、気をつけるにこしたことはない」

兄の無責任ともとれる発言に、ファルヴァルトは応じずに仏頂面のまま、従者がつれてきたたくましいつややかな黒毛の軍馬の手綱をうけとり、とびのった。重い鎧かぶとをつけているとはとても思えない身のこなしであった。

(5) 狂戦士

討伐軍は王立騎士団三千にワーゼン守護兵団二千、さらに近隣の貴族の城塞から供出された兵をふくめ、一万余に膨れあがった。

王城より出立して、すでに三日。ライエル反乱の報より五日が過ぎようとしていた。討伐軍は王城より東に広がる森とノゼン平原との境目に街道を中心として陣を敷き、迎え撃つ体制を整えていた。反乱軍はすでにライエル領から王城にいたる半分以上の道のりを踏破している。

もともとライエル領は東のソーレアと国境を接する辺境の地。早馬をつかっても王都ワーゼンまでにはゆうに五日ほどかかる距離にある。それが騎馬兵のみの構成とはいえ、五千の兵の、しかも立ちふさがる城塞を落としながらの移動となれば、驚異的な進軍の速さであった。

「魔法をつかつてるって、噂がたつわけだよな」

ファルヴァルトは密かにつぶやいたが、そばに控えていた白髪の老将に聞きとがめられた。副将としてファルヴァルトの補佐につかされたトーラ將軍であった。

かれは今年、齢60となろうしていたが、華々しい戦歴と豊かな経験をもつ歴戦の勇者である。若くほとんど実戦の経験のないファルヴァルトの補佐としては適切な配置であったのだが、それをいいことにファルヴァルトはいままで戦略、戦術の立案をかれに任せたり、まったく口を挟もうとしなかった。それゆえ、幕僚たちはそんな彼を形ばかりの総指令官として軽んじはじめていた。

もっとも、ファルヴァルト本人も自分の役まわりは兵たちの士気を鼓舞するための精神的支柱、一種のお飾り程度としかおもっていなかった。幕僚たちの軽侮のまなざしなど痛くも痒くもなかった。

「なんと、仰せられましたか、殿下」

「いや、別に」

トーラ將軍のよく日に灼けた皺ぶかい顔を横目にみやりながら、ファルヴァルトは考えこんだ。

この將軍はたしかに経験と実績をつんでいるが、不測の事態に対応する柔軟性は欠けている。もし、魔法なんていうわけのわからないものに出会えばあつというまに混乱してしまい、それを補なつてやらなくてはならないだろう。もっとも彼とて、魔法を前にしていかにか戦うかというとはなはだ自信がなかった。

(まったく、ルジエンだけでも厄介なのに、そのうえに魔法使いだつて！)

かれは頭をかかえたくなくなった。だれかと代われるものなら、代わりたいものだった。

だが、こういう心配ごとをいつまでも抱えたままにしておくには、かれは若く楽天的すぎ、また物事を深く追求することにも慣れていなかった。

(まあ、いいか。魔法使いなんて、いるか、いないかさえもわからないものごとをいつまでも心配したつて、しょうがない。いたら、いたらで、なるようになるさ)

眼前のノーゼン平原をつめたい秋風が吹きすぎていく。金色に枯れかかった緑の下生えがゆれ、さざ波が走る。

そのはるかむこうまでのびる灰色の街道の彼方に、ファルヴァルトは土煙をみとめて、静かな声で言った。

「將軍、反乱軍のご到着だ」

陣営はたちまちのうちに緊張につつまれた。

やがて土煙のなかから、赤地に白い鷹のライエル伯の旗を陣頭におしたて、いまや反乱軍と墮したライエル白鷹騎兵、五千がその姿をあらわした。

馬のいななきが風につて聞こえてくる。馬蹄の轟きが街道をゆるがす。一系乱れぬみごとな行軍であった。

そして、それはまた不気味な進撃であった。兵士たちは鬨の声ひとつあげることもなく、不吉な沈黙が反乱軍を覆っていた。

「そんな馬鹿な！」

討伐軍の首脳陣は息をのんだ。

ライエル軍はいったん停止して、陣をたてなおすことなく、そのまま突入してこようとしていた。

ふつうはお互いに布陣を敷き、それからおもむろに弓矢の応戦から戦いをはじめこの時代には、とても考えられぬ戦法である。

幕僚たちの目がいつせいに実質的な指令官であるトーラ將軍にむけられた。

しかし、かれは長年の経験に逆にとらわれ、狼狽え、策を見うしなっていた。

それを見てとって、ファルヴァルトは小さく口のなかで舌打ちした。

(しょうがないな)

反乱軍は予想以上に迅速に行動している、こちらもはやく対処しなければ、このままではやすやすと中央突破されてしまう。

数のうえでは圧倒的に勝っているものの左右に展開しているぶん、討伐軍の布陣は薄くなっている。しかも、そのまま反乱軍が駆け抜けていくようなことになれば、面倒な事態になりかねなかった。

この地より王城までの兵のほとんどをかき集めてきたのだ。当然、ここより王城にむかう道はほとんど無防備と化し、王城そのものも通常に較べれば、ほとんど兵をおいていないに等しい状態であった。

しかも、騎馬兵のみの構成である反乱軍にたいして、討伐軍はその半数以上が歩兵。機動力に差がありすぎ、追いつがるには無理がある。なんととしても、ここで彼らの進撃を阻まなければならぬのだ。

「あの進軍のはやさじゃ、左翼、右翼の兵をあつめてても、間にあわないな」

ファルヴァルトは何気ない様子でいった。

トーラ将軍が不思議なものをみるように怪訝げに王子をみやった。いままで、かれが軍議に口を挟んだことはなかった。

ほかの幕僚たちも同様である。

だが、その視線にも動ずるふうもなく、王子はいつものとぼけた調子でつづけた。

「むしろ、側背を左右からうたせ後続を断ち、先鋒部隊を中央本隊で叩く。これで、いいのかな、将軍」

ちょうど問をあたえられた生徒がそれに答えたというふうに、将軍に問いかける。

老将としての誇りを傷つけられずに救われた形となったトーラ将軍は、皺ぶかい顔を輝かせた。

「仰せの通りです、殿下」

その歴戦の勇者の瞼の奥になかば隠れた黒い瞳には、深い敬慕の色がめばえた。

伝令が行きかい、戦太鼓がとうとうと打ちならされるなか、両者が激突した。

かかげた盾で弓矢の攻撃をふせぎながら突撃してくる反乱兵を本隊がうけとめる。

このあいだに左翼と右翼の部隊が側面にまわりこみ、後続部隊を絶った。孤立した形になった反乱軍の先鋒部隊は合流した左翼、右翼の兵にとりかこまれるかたちになり、そのほとんどが殲滅された。しかし、それは実際のところたやすい戦いどころではなかった。

またむろん戦記に描かれるような麗々しくも気高い戦いでもなかった。むしろ、陰惨かつ醜怪な酸鼻をきわめる戦いであった。

反乱兵の戦いぶりは異常であった。

かれらは傷を負っても負っても立ちあがってきた。致命傷を帯び血を傷口から噴出させながらも、まったくそれを気にするふうもなく、戦いを挑んできたのだ。

戦いをやめさせるには、その息の根を完全に絶たねばならなかつ

た。

それはまさしく自らの死以外でしか戦いをとめられない、伝説の狂戦士以外の何者でもない。そんなものが、団体であらわれたのである。厳しい規律に律せられたルーメリア騎士団を軸としていなければ、討伐軍はあつというまに瓦解していただろう。

分断された反乱軍の後続部隊はすみやかに撤退し、平原に陣を敷き、左右に展開した。討伐軍もそれにあわせて、布陣を開き、相手の出方をうかがう。圧倒的多数により先鋒部隊をたいらげ、反乱軍のこれ以上の進撃を阻んだものの、全軍は八千ほどに討ち減らされていた。それに対して反乱軍は五百の兵を失ったにすぎない。

彼らの尋常でない戦いぶりは、討伐軍を震撼とさせ、戦いの出足をにぶらせていた。

そして、ライエル反乱軍のほうは、なにかを待ち受けるようにその場から動こうとせず、戦線はそのまま膠着状態に陥った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1575r/>

未裔たちの伝説

2011年9月19日03時21分発行